人文会ニュース

1986.10

図書館における学術図書の収集について

早稲田大学図書館　山本信男　1

「日本精神史の深層」フェアについて思うこと

西武ブックセンター　今泉正光　11

人文書講座X

女性・ジェンダー・n個の性……芹沢俊介　17

常備寄託の見直し……みすず書房　相田良雄　30

最近の販売活動から……筑摩書房　菊池明郎　34

46

業務用

頼藤和寛

自我の狂宴

エロス　心　死　神秘

聖と俗の世界をめぐる人間心理のカラクリを暴きだす、知恵と毒と笑いに溢れた痛快人間論。　四六判　1200円

悩みを活かす

◉D・レイノルズ　大原監訳／岩田訳

森田療法による建設的な生き方を導く方法を示す。四六判　1200円

カウンセラーへの道

◉東山紘久　感受性の訓練、聞き方の訓練、ロールプレイなどを紹介する実習指導書。四六判　1200円

創元社　〒530 大阪市北区西天満1-4-2　〒162 東京都新宿区山吹町77

家族？　スタジオ・アヌー編

普通の人々による普通の人のための人生相談。失敗しない家族なんてない。「私たちは自分が直面した家族の問題にこんなふうに対処した」——北海道から沖縄まで、17歳から95歳にいたる100人の老若男女が語る「日本の家族」の現在と未来。　2800円

アビ・ヴァールブルク伝　ある知的生涯

E・H・ゴンブリッチ　鈴木杜幾子訳

20世紀の知的宇宙を一変させながら、謎に包まれていた偉大なルネサンス学者の生涯を描く伝記作品の白眉。6200円

晶文社　東京都千代田区外神田2-1-12　電話（255）4501

もうひとつの学校へ向けて

村田栄一　里見実

〈手仕事〉と〈溜り場〉をテーマに、往復書簡体でかわされる新しい教育論。　2000円

アジアの歩きかた

鶴見良行

アジアは歩かなければわからない。暮らしの細部から物語る最新エッセイ集。1400円

江戸の想像力　—18世紀のメディアと表徴

田中優子

同時代の異質な個性とジャンルを織り込んで近世の〈運動〉を描く気鋭の労作。2600円

東京神田　**筑摩書房**　小川町2

誠信書房

東京都文京区大塚3－20－6

対人心理の分解図

齊藤　勇著　客観的にとらえにくく目に見えない人の心の動きや変化を図式やイラストを用いて視覚的に楽しく解説する。　一五〇〇円

カウンセリング・ワークブック

国分康孝著　カウンセラーに必要な基本概念を学ぶためのワークブック。自分自身の理解度を確めながら学べるユニークな書。　一八〇〇円

図書館における学術図書の収集について

早稲田大学図書館　山本信男

一　図書館と資料収集

図書館資料、施設、図書館員、および、図書館の内部装置は、図書館の四大構成要素と呼ばれている。資料は、図書館活動の基本であり、資料がなくては図書館活動は始まらない。図書館は、資料を収集し、整理し、これらの資料を提供するための社会的機関と定義されており、この定義においても、資料が中核に置かれている。施設は、資料を整理して収納しておく場所であり、図書館利用者に、これらの資料を利用させるための場所である。すなわち、図書館サービスを行うための空間である。館員は、資料を利用し易いように整理し、これらの資料と利用者を結びつけるための仲人のようなものである。図書館の内部装置とは耳馴れない言葉であるが、収集され整理された資料を、利用者が使い易いように工夫され考案された図書館独特のトゥール類である。具体的には、カードを中心とする目録類や各種索引類が典型的なものであり最近ではコンピュータ端末も代表的な図書館の内部装置といえるであろう。

このように図書館はいくつかの要素から成り立ってい

るのであるが、図書館が図書館として機能するためには、まず資料が絶対に必要であり、資料がなくては図書館は成り立たない。そこで資料収集という重要な業務が図書館活動の出発点として存在する。

資料収集というのは、単にこの世に存在している資料を無差別に収集することではない。いかなる種類の図書館でもそれぞれの図書館の存立目的があるはずである。すなわち、何を目的としてその図書館が作られたのかということである。前に述べたように、図書館固有の機能として資料収集という基本的な機能があるが、資料収集を具体化する目安は、それぞれの図書館が持っている存立目的である。存立目的に合致するように資料を収集することが、ある図書館固有の資料収集という業務である。いいかえれば、資料収集とは、図書館の基本方針の実現であり、意思の具体化なのである。従って、資料収集は、能動的、積極的な行動なのであり、決して単にそこにあるから集めるというような消極的な行為ではない。常に自分が所属する図書館の存立目的を考え、活動方針を考えながら資料を収集して、はじめてその図書館の資料収集といえるのである。これが、図書館の基本的な機能の一つである資料収集の意味である。

このようにして収集された資料の集団を蔵書と呼び、目的の実現に向けて蔵書を拡大し充実して行く行為を蔵書構築と呼んでいる。すなわち、蔵書（コレクション）とは、蔵書構築という積極的な行動を通じて集められた資料の集まりであり、自然に集まったものではないのである。蔵書を表わす英語のコレクションの基になっているコレクトという言葉は、「集める」という能動的な意味である。

資料収集は、前述したように、ある図書館の目的実現のための基本的な業務であり、まず第一にその図書館の現在の利用者の要求を充たすために行われる。大学図書館を例にとれば、資料収集とは、当該大学の設立目的にそった教育および研究を実現させるためのものであり、当該大学の構成員（教職員、学生、校友）に奉仕するために行なわれるものである。

図書館は、現在および将来の利用者のために資料を収集しているのであるが、同時に、人類の記録された文化を保存するという重要な機能を持っている。過去および現在の人類が築き上げた文化を保存し伝承して行く義務

の一翼を図書館は担っているのであり、これは、図書館が持つもう一つの重要な機能なのである。図書館が行う資料収集にはこのような人類文化の保存・伝承という大切な意味が含まれているのである。

二　資料収集方法の変遷（早大図書館の場合）

早稲田大学図書館では、従来から、新刊書収集の方法として、見計い制を採用していた。すなわち、生協を中心とする近隣の書店から定期的に新刊書を取り寄せ、それらを選書室に排架して選書を行っていた。もっとも、新聞や雑誌の広告およびダイレクトメールによる新刊情報を基にした部分的な注文制も同時に行っていた。

しかし、出版点数の急激な増加に伴い、従来から行っていた見計い制では、すべての出版物を網羅することは不可能である。特に、現在の出版物流通機構の最大の問題点と思われるパターン配本（重点配本制）によって、従来からの見計い制では目に触れない図書が増えつつある。大学図書館における資料収集の中心は、いわゆる学術書であるが、これらの学術書のうち、大手取次を経由する通常のルートには乗らないものが多くなり、大学図書館の資料収集にとって、見計い制の大きな欠点の一つとなっている。また、見計い制の下では、出入の書店が、取引関係のある取次から配本されたすべての図書を、見計い用として図書館へ持ち込むとは限らない。やはり利潤の多いものを中心に、書店で選定して持ち込むケースが多いと考えた方が自然であろう。すなわち、一度取引書店のフィルターを通ったものの中から選書しているのが現状であり見計い制のもつもう一つの欠点であろう。

次に、従来から行って来た見計い制のもつ主な問題点を要約してみる。

① すべての出版物が、図書館と取引している書店へ配本されているとは考えられず、従って選定対象とする出版物が限定されていること。

② 取引書店の性格にもよるが、見計い制の下では、学術書が減少しつつあり、一般教養書が多くなりつつあること。これは、現在の流通機構から来る当然の結果であろう。

③ 出版物が、一旦取引書店のフィルターを通して持

ち込まれる見計い制の下では、体系的な収集は困難であること。

以上のように、従来から行って来た見計い制は、いくつかの問題点を持っており、大学図書館が体系的な資料収集を行おうとする場合、決定的とも思える欠点がある。

現在、多くの大学図書館や専門図書館では新刊書収集の方法として、注文制をとっている。これは、現在の出版物流通システムの下では、見計い制では充分に対応しきれなくなってきているためであろう。早稲田大学図書館でも、三年位前から、従来の見計い制中心から注文制中心に切り換えて選書を行っている。すなわち、消極的な収書方法から積極的な収書方法へ転換した訳である。言葉を変えていえば、「待ち」の収書から「攻め」の収書へと戦術転換をしたともいえるであろう。次に、注文制の方法について略述する。

（一）トゥールについて

注文制をとる場合、最も重要なのは、選書のためのトゥールとして何を選ぶかである。新刊書収集のためのトゥールは、現在数多く出版されている。例えば、国会図書館の日本全国書誌、大手取次の新刊情報、「これから出る本」、各版元の新刊案内等々である。しかし、それぞれに一長一短があり、特定のトゥールに限定することは、きわめて困難である。そこで、早稲田大学図書館では、種々調査し考慮した結果、日本図書館協会編集の「新刊案内」を中心にして選書を行って行くことに決定した。この「新刊案内」を中心として選書を行おうとする理由は次の通りである。

① 新刊書のカバー率が高いこと

「新刊案内」は日本図書館協会が編集し、図書館流通センターが発行しているものであるが、中味は、東販の「新刊情報」が中心である。東販という日本最大の取次を通る新刊書（いわゆる流通本）を中心にしているために、それだけでも単一の情報誌としては最もカバー率が高いのは当然であるが、そのほかに、図書館流通センターや日本図書館協会が独自に収集した新刊情報も掲載されている。特に、東販を通らない学術書等の情報が得られるのは、この「新刊案内」の一つの特長であろう。従って、現在利用しうる新刊情報誌としては、速報性、カバー率の高さから考えて最適のものと考えられる。

② 書誌情報が信頼できること

各種の新刊情報やダイレクトメールの書誌情報には、誤りが少なからずある。注文制の下では、多くの場合書誌情報を唯一の頼りとして選書をするために、書誌情報の誤りは、選書作業に無用の混乱をもたらす場合が多い。また、誤った情報のために重複して購入し、経費の無駄使いとなる場合もかなりある。すなわち、注文制をとる場合には、書誌情報の正確さが特に要求されるのである。「新刊案内」の書誌情報は、他のものに比べて誤りがきわめて少ないと思われる。これは、日本図書館協会や図書館流通センターの目録情報の専門家が作成し、数回にわたるチェックを経て公刊されるものだけに、書誌情報に対する信頼性は、他の同種のものに比べてきわめて高いと考えられる。

③ 情報が早くキャッチできること

東販や日販の新刊情報と、そのスピードはほとんど同じであろうが、完全で正確な書誌情報という点では、「新刊案内」が最も早いと考えられる。特に、国会図書館の「日本全国書誌」は、新刊発行から三カ月以上も遅れて情報を提供していることを考えれば比較の対象になりえないと考える。

以上のような理由から、「新刊案内」を中心として、注文制による選書に切り換えたのであるが、新刊の出版物がすべて取次を通じて流通しているとは考えられない。いわゆる非流通本の割合は、全出版物の三〜四割に達するともいわれている。また、前にも述べたように、二大取次を中心とした現在の出版物流通機構では、資本優先の論理が徹底しており、従って利益の生じ易い出版物を中心にして構成され運営されているように思われる。すなわち、大量に売れる見込みのない学術書類は、通常の出版物の流通ルートには乗らないものが多いように思う。従って、前記の「新刊案内」にも掲載されない学術書類が多いと考えられる。このような現状を考え、前記「新刊案内」のみを唯一の情報源として選書を行っている訳ではない。いわゆる取次を通る流通本については、「新刊案内」を情報源として選書し、取次を通らない非流通本については、他の情報誌を使って選書を行っている。図書館、特に大学図書館においては、このような非流通本についての情報をいかに収集し、その中から、大学図

書館の蔵書に適しているものをいかに多く収集するかが、蔵書構築にとってきわめて大切なことである。従って、「新刊案内」の他に、次のようなものを、特に非流通本の情報誌として使用している。

a　日本全国書誌および古書通信

地方史、考古学、記念論文集、その他非売品を収集するトゥールとして使用している。

b　各版元のカタログおよびダイレクトメール類

これらの情報源は、従来から使用していたが、今後主要なものは、それぞれについて担当者を決めて、より詳細に調査し検討して行く考えである。

c　主題別書誌類

各主題に関する年鑑、年報類。例えば、演劇年鑑や演劇年報の類である。さらに、経済学文献季報や経済史文献解題等を使って、各主題に関する文献収集をより深めて行く。選書トゥールとして使用している主題別書誌の種類は、現在七十点近くにのぼっている。

d　地方新聞および学会誌

地方の出版物については、全国の主な地方新聞を使って情報を収集し、主要な刊行物を入手している。この作業は、数人の担当者が分担して行っている。また、主要な学会誌の文献欄を資料収集の重要な情報源としており、この作業は、今後益々重要性を増して行くものと考えられる。

（二）　担当者について

従来は、受入係というごく限られた人数で選書を行っていた。前にも述べたように、図書館における資料収集は、図書館の基本的な機能である。このような重要な機能をごく限られた特定のセクションや限られた人達だけで果せるものではないし、また、果してよいものでもない。このような図書館の根本にかかわる作業は、すべての図書館員が参画し実行して行くべきものであろう。このような考えの下に、現在、日本の出版物の収集に関しては、和漢書係全員（十名）が、それぞれの分担を決めて資料収集を行っている。今後は、全館員を主題毎にグループ化し、収集活動を行ってゆきたいと考えている。それが、図書館の最終目的であるレファレンスサービスの質的な向上につながると考えられるからであり、図書館の存在価値を高める道だと考えるからである。

三　資料収集をめぐる問題点

大学図書館で実際に資料収集に携わってみて、まず感じるのは、情報不足ということである。高度情報化社会と呼ばれ、情報がはんらんしている現在、情報不足というとちょっと奇異に思われるかも知れないが、この意味は、適確な情報が少ないということである。毎日図書館へは、各版元等からのダイレクトメールや各種情報誌が山と送られてくるが、その意味では、情報過多といえるかも知れない。しかし、それらの情報の中から大学図書館に適わしいものを選び、資料収集に結びつけようとすると、どうも問題があるように思う。まず、ダイレクトメール類について感じるのはすべて同じ感じで、個性がないように思われる。受け手に対して何かを主張し訴えるためにダイレクトメールを出すのなら、それぞれのダイレクトメールに個性があっていいはずである。ある出版物についての知り得るすべての情報を同じようにアレンジしたのでは、せっかく訴えようとしている出版物そのものが、雑多な情報の中に埋没してしまう。要するに、必要な情報が正確にコンパクトにまとめられて送られて来ない感じである。例えば、不必要と思われる推薦文が多過ぎると思う。大学図書館における資料収集の意味を考えれば、有名人が推薦文を書いているから購入するというようなことはありえないことは自明のことであろう。資料の収集は、あくまで冷徹に行うべきものであろうし各図書館でも実際に行っていることであろう。資料収集に携わっている人達の欲しがっているのは、適確な情報だけである。例えば「何に関する本なのか」、「どの程度にまで掘り下げた内容なのか」、「オリジナル資料をどの程度使っているのか」、「資料的価値はどの程度あるのか」、「再版ならば初版とどう違うのか」等々についての情報が欲しいのである。少くとも大学図書館に関する限り、視覚に訴えるようなダイレクトメールは不用である。

次に、各版元のカタログについて感じていることであるが、それぞれの版元が個性をもち特長をもって活動している以上当然の結果なのかも知れないが、カタログの記述がまちまちで、資料収集の立場から見れば、何とか統一できないだろうかということである。すなわち、原物を見て選書をするのではなく、書誌情報のみによって

本を選んでいる現状からいえば、書誌情報の記載の仕方やその内容がまちまちでは判断しにくい場合がある、ということである。もっとも、これは、すべての版元のカタログについて該当することではない。また、重版、再版、品切等、ある出版物のステイタスに関する情報のないカタログもあるが、これらは、資料収集にとって重要な情報なのである。

資料収集上のもう一つの問題点は、よくいわれる流通上の問題である。せっかく出版情報の中から図書館に適わしい情報を入手して発注しても、求める本が入手できない場合がかなりある。これは、現実に求める本が品切や絶版となってこの世に存在しなくなっているのなら仕方のないことであるが、どうもこれは取次を含めた流通上の問題であるように思う。特に、取次のもついろいろな機能が、充分に果されていないからではないだろうか。版元に在庫があっても、時として品切あるいは不扱いという返事が返ってくる場合がある。大量に生産し、大量に販売しないと利益が上らないことはよく分るが、出版の世界は、通常の経済原則だけに支配されるべきではないと思う。たとえ少数ではあっても、求める人がいる限り、適確に配本できるように、流通機構を整備することが急務であるように思う。

四　図書館から出版界へ望むこと

資料収集を行っている立場から、出版界へ望むことはいくつかある。

まず、出版情報の提供の仕方についてである。前にも述べたことであるが、図書館では各種カタログ類やダイレクトメールを、出版に関する情報源として使用している。営業政策上、次から次へと情報を提供することは必要なことであろうが、受け手側から見ると、多過ぎる情報は、却って逆効果になってしまう場合があるように思う。同じような情報を何回も提供するのではなく、すっきりと整理された情報を定期的に送った方が、情報の受け手にとってはより効果的ではなかろうか。情報過多の状況は、逆に情報不足の状態を作り出す危険もあるように思う。

次に、出版界の人達がもう少し図書館のことを理解し

てほしいということである。出版界からいえば、市場調査の必要性ということになろうか。未だ図書館の資料購入費の総額は出版物の総売上げ額の十%程度にしか過ぎず、業界にとって大した市場ではないかも知れないが、この割合は将来大きく変化する可能性は充分にある。ここ数年を見ても、公共図書館や大学図書館の資料購入費は飛躍的な伸びを示している、イギリスのように、すべての出版物の約半数を図書館が受け持つ時代が直ぐに来るとは思わないが、それに近づくのはそれほど遠い将来ではないように思う。図書館の資料収集は、今や買うべきものを選ぶ時代から、買わないものを選ぶ時代へと変化している。また、個人では本を買わず、図書館に頼る傾向が強くなっている現在、図書館でも従来のように一部につき一冊の本があればよいという時代は終り一部につき複数の本を揃えなければ利用者の要求に答えられなくなっている。すなわち、図書館を対象とする市場が大きく拡大する余地は充分にあるのである。出版界でも、このような図書館の現状および将来をはっきりと認識して対応すべき時代である。

次に、これは早速にでも実行したいと考えているが、流通上の問題から欲しいと思う本が入手できないケースが時々あるが、これを解決する方法として、版元に対してブランケット・オーダーを出したいと考えている。しかし、これは、現在の商慣習上許されるのであろうか。すなわち、例えばA社の全出版物を直接図書館へ納入してもらうことは可能なのであろうかということである。特に、大学図書館の場合、一定のレベルにある出版物については、ほとんどそのすべてを学術研究および教育のための資料として収集している。その割合は、全出版物の約三分の一程度であろう。この三分の一の中味を見ると、特定の版元に集中しているように思う。従って、これらの版元とのブランケット契約を結んでおけば、大学図書館が必要とする流通本に関しては、その大半が自動的に集まることになる。従って、資料収集のエネルギーを非流通本の分野に集中できることになり、図書館の蔵書をより特色あるものにすることができるからである。前にも述べたように、資料収集の対象は、流通本と非流通本に分けられると思うが、流通本は、いわば基盤整備あるいは地ならしであり、非流通本がその上に作られる建物のようなものであると考えられる。従って、非流通

本をいかに充実させるかが、資料収集のポイントの一つである。もっとも、基盤整備を手抜きなく完全に行っておくことが前提であるが。

早稲田大学図書館では、昨年生協を中心とする主な取引書店により、早稲田図書供給組合を結成し、その組合を相手に図書の発注および納入業務を行っている。組合設立の主たる目的は、図書館の機械化に伴う手続の簡素化および省力化であるが、同時に、資料収集の分野に、プロの力を導入し、よりレベルの高い資料収集をしたいと考えたからである。例えば、前に提案した主たる版元とのブランケット契約の締結およびその完全な実行を組合に委せることによって、流通本の分野に属する資料収集をよりスムーズに行うことができるであろうと考えられる。また、書店組合の結成は、数十年に亘る近隣書店との関係を改めて密にし、近年沈滞しつつあるといわれる中小書店の生きる新しい道を模索する一助になればと考えたからである。図書館における資料収集が、現在の流通機構を使って行われる限り、自分達の手足となって動いてくれる近隣書店の存在は、資料収集にとって不可欠な要素であると考える。

いずれにしても、図書館にとって資料の収集は生命である。そして、生命を支える源泉は出版界である。図書館と出版界は、このような切っても切れない関係にある。また、出版界にとっても、自分達が自信をもって作った出版物という日本の文化財を、後世にまで伝えてくれる図書館の存在は、頼もしい限りではなかろうか。

図書館は、急激に変りつつある。従来の倉庫的なものから、見せるための施設、本を読ませるための機関へと変貌しつつある。欧米のように、本は図書館で読むもの使うものであると一般に考えられる社会が、わが国にも近い将来必ず定着するであろう。そのような時代には、図書館は、出版界にとって最大の市場となるであろうし、出版物のショールームともなるであろう。すなわち、図書館そのものの市場の他に、個々の利用者に本の需要を喚起する場ともなるであろう。

図書館が出版を支える重要な機関として機能し、出版の再生産を促す原動力として作用しうる時が一日も早く来ることを願っている。

「日本精神史の深層」フェアについて思うこと

西武ブックセンター　今泉正光

今年の二月十七日十八日の両日、池袋西武百貨店8F（スタジオ200）で、「日本精神史の深層」と題してシンポジウムを開催し、併せて11Fブックセンターでブックフェアーを行った。今回のフェアーは、春秋社「仏教と日本人」の刊行を記念しておこなわれたものである。十七日は山口昌男（文化人類学）、藤井貞和（国文学）、宮田登（民俗学）の三氏で行われ、テーマは「物語と禁忌」であった。十八日は網野善彦（歴史学）、上野千鶴子（社会学）、宮田登の三氏で行なわれ、テーマは「境界と無縁」であった。山口・藤井両氏の対話では、源氏物語を中心としながら「王権論としての天皇」と「歴史的存在としての天皇制」の差異について、興味深い展開がなされた。網野・上野両氏の対話では、外来王としての天皇が古代から中世に移行する過程で孕む問題が焦点になっていた。十八日はあいにくの悪天候にもかかわらず、多くの方が来場され、大盛況のうちに終了した。来場者を見ると、予想外に若い人が多く、今回のテーマを考えると意外であった。

我々は数年来、日本文化論の動向に注目していた。私自身の読書体験でも、古くは吉本隆明の「共同幻想論」があり、それ以後でも梅原猛の古代論がベストセラーになるなど数多くの著作がありながら、どれも単発的で一つの傾向を確立するまでには至っていないように思われる。これまでにも、日本史ブームがあったし、ジャパネスクといった言葉も流行したが、大きな潮流にはなり得なかったように思う。しかし、日本史に対する興味は依然として強く、雑誌やビジネス書の分野では人物伝や事件中心の企画がヒットしている。サラリーマンの出世競争や企業の戦略を歴史的人物や事件に同一化する手法は、今や常套手段になっている。現代の危機感を利用して巧みではあるが、何かそらぞらしさが漂っているように思える。実学の勝利とでも言うべきか、英雄論や過度の思い込みが強く、日本文化や歴史を広い視点から捉え直す試みは少ないように思う。もちろん個々の分野では、活発な発言がなされているし、息長く売れている本は数多くある。

日本精神史の文脈で言えば、歴史学では、古くは原勝郎「日本中世史」、石母田正「中世的世界の形成」、永原慶二「日本の中世社会」、佐藤進一「南北朝の動乱」、網野善彦「無縁・公界・楽」等中世史だけでもかなりあるし、更に中世文化論では、横井清「中世民衆の生活文化」、桜井好朗「中世日本文化の形成」、岩崎武夫「さんせう太夫考」などがコンスタントに読まれている。

他の分野をリストアップしてみると、文学では、唐木順三「中世シリーズ」、益田勝美「火山列島」、西郷信綱「古代もの」、松田修「暗のユートピア」、高田衛「八犬伝の世界」、野口武彦「江戸シリーズ」、馬場あき子「鬼の研究」等がある。民俗学では、柳田国男・折口信夫を筆頭に、高取正男「神道の成立」、「日本的男考の原型」、谷川健一「青銅の神の跡」、宮田登「神の民俗誌」、宮本常一、坪井洋文「イモと日本人」等がある。宗教史では、道教関連や鈴木大拙「日本的霊性」、五来重「仏教と民俗」、山折哲雄「日本人の霊魂観」等がある。思想史では、丸山真男「日本政治思想史研究」、「講座日本の思想」、九鬼周造「『いき』の構造」、和辻哲郎「風土」、湯浅泰雄「古代人の精神世界」等がある。

以上、各ジャンルで地味ではあるが着実に動いている本を列挙してみたが、表街道、裏街道があり、中心と周

縁など余りの多様さに正直いって呆然としてしまう。そして、これ等の本は地下水脈のように深層に沈んでいるのだ。実際、ほとんどの書店では、十進法分類による陳列が基本的になされているために、このような日本精神史関連書籍は、脈絡もなく各分野に分散させて姿を現わしてはないように思う。そこには各分野の歴史と現在があるだけで、時代の幅やテーマの奥行きが見渡せないでいるのが現状ではないだろうか。日本文化や精神史のドラマが欠落しているのだ。何か話題のテーマがあると、関連書籍をイベント展開して一時的に集積するのが限界ではないだろうか。これは我々の反省を含めてではあるが、そう思う。

書店が従来の十進法分類にとどまっている限り、日本文化や精神史の持つダイナミックな知を読者に伝えることは難しいように思える。よく私達は顧客から、君達は本を売っているのに内容を知らな過ぎるといった批判を耳にする。あるいは、こんな有名な本も知らないのかといった厳しい言葉も耳にする。それは出版点数の量や教育の質的低下などに起因しているのだが、分類方法の硬直化も一つの要因ではないだろうか。たしかに大型店の場合、商品量が多いため明確さが優先されるのは理解できるが、余りにそれを追求し過ぎて、安易な分類を行っていないだろうか。本来有機的に結合している歴史・文学・思想上のテーマをバラバラに分断してしまい、弊害が前面に出ているのが現在であると思える。

70年代前半から、山口昌男氏を先頭に文化人類学が大きく台頭してきた時のインパクトを考えて見ると、そこでは、思想・歴史・宗教・芸術の達成を自由自在に結合し、多様な領域を道化のように疾走する知の在り方が多くの読書人を魅了していた。天皇制のタブーをアフリカの王権論で相対化し、従来の歴史・思想家が突破できなかった問題を軽々と乗り越えていった。山口氏以後、青木保、浅田彰、中沢新一、小松和彦氏等が方法をより拡大深化させながら、仕事を進めている。文芸批評でも、小林秀雄流の私批評を脱却して、フランス構造主義等の理論を導入しながら吉本隆明、蓮実重彦、柄谷行人氏等が文学のみならず思想界で知の活性化を図っている。最近話題になった「異人論」を例にとると、小松和彦、赤坂憲雄両氏が、従来の日本史ではあまり取り上げられることの少なかった闇の人々に注目し、日本歴史の再構築

を図っている。そこでは、柳田、折口、吉本、フーコーといった人々の思想をバックボーンに文化人類学や宗教学を駆使して境界から歴史の中心に接近している。これは今流行のポストモダンの文脈で言えば、バークやジラールのスケープゴート論に重なるし、今村仁司氏の暴力論に対応する問題でもあるのだ。又、柳田の「山人考」や折口の「まれびと論」、阿部謹也氏のアジール研究、網野氏言う非農業民の存在など実に様々な場所へいざなうテーマでもある。又、現在の視点から見れば、教育に於けるイジメや様々な人権差別問題などアクチュアルな課題に刺激的視点を提出しているように思う。

　このように考えるならば、一冊の書物を我々書店人がどう受け止めて展開するか、これは大変おもしろい仕事である。経営的には厳しい時代であるが、書店人にとって実に楽しい時代に突入したものだと言えるのだ。特に人文図書は売上げ的には地味であるし、スペース的にもダイナミックな展開は限られた店舗でなければ困難である。しかし、時代の変化や知の流れをすばやく発信する場としての書店が、世界の大きな変容に対応していないことが本当は問題なのだと思う。今、流行の情報メディアのみが時代の先端にいるわけではない。コンピュータやメディア機器を導入することには熱心でも、本の陳列や展開は旧態依然とした書店が意外に多いのではないだろうか。一度十進法分類に染まってしまうと、なかなか脱却するのはむずかしい。あるいは、経営上の必然から前年比何%や回転率といった数値で、書店を分析する常識が商品を見えにくくしているかも知れない。確かに、それらの数字はある面で我々の当面する現実を捉えているけれども、今一番我々に求められている課題——具体的に棚をどのように展開したら、一冊の書物を、あるいは読者を満足させることができるかといった課題に答えることはできないように思う。せいぜいの所、ジャンル別のベストセラーを分析して、いま、中世史関連が話題になっているからフェアーをやってみようといった一過性の祭に終ってしまうように思える。

　出版社側でも、編集・営業共に書店との交流を深めてほしいと思う。目録一つを取ってみても満足のいくものが少ない。最近になって、ようやく人文図書目録がジャンル別になったが、それでも哲学、心理、歴史といった分類のみで一般読書人や書店人の要求からは、はるかに

遠い所に居るように思える。テーマ別、横断的、立体的な配列で、現在の知を反映した興味あるブックリストができないものだろうか。実際、我々が品揃えを行う上で一番困難をきわめているのが本の選定である。今回の日本精神史の場合、一応各先生方に選定を委ねたが、それでも我々が下資料を作成するのに、現状の図書目録は余りに不備で、ほとんど使用できなかった。むろん現在の目録を全面否定するわけではなく、その上でなお時代や学問の現状を反映したブックリストはどうしても必要ではないか。ある書店で行われたブックフェアのリストが他の多くの書店で利用されている様な状況では、とても書店独自の品揃えなど望むべくもないように思う。個人の知識や一出版社の努力のみでは、現状を改善する方法は見出されない以上、人文会や歴史図書刊行会の存在は大きな期待を荷なうものとなるだろう。「書店は棚に始まって棚に終る」と信じている私達は、一日も早く、ブックリストが大幅に改善されることを祈りたい。

ここ数年、JICC出版社、五月社といったこの分野ではマイナーな出版社から時代を明確に捉えた本が出ていることは大変興味深い。一時代前に「志」の出版社が話題になったが、小さな出版社でも充分大手出版社に対抗できる内容の本ができているといった人文書独特の在り方に注目したい。最近の人文書籍の世界では、四千～五千部から二千～三千部へと大きく低落しているようである。当然価格は上がる。けれども、話題の本は確実に実績を伸ばしている。この事実をふまえて、今後の人文

ミルチヤ
エリアーデ

エリアーデ日記（全2冊）
石井忠厚訳　上2500円・下3000円

永遠回帰の神話■祖型と反復■
堀一郎訳　定価1500円

大地・農耕・女性■比較宗教類型論■
堀一郎訳　定価1800円

オカルティズム・魔術・文化流行
楠正弘・池上良正訳　定価1300円

一九四五年パリで三八歳のエリアーデが想像力についての記述を始めてから、一九六九年六二歳、宗教的創造性をめぐるオカルト的なものの意義へのユング的思索で切れる興趣無尽の日記

エミール・シオランと同門・ルーマニアの生んだ宗教史家エリアーデの思索は、近代ヨーロッパ文明の疲弊した合理性をつき崩す深層の中に可能性を探る。作家的想像力とユング心理学を駆使し、自らのヨガ体験によって東洋の〝神秘〟を体得し、練金術的世界に下降して成ったエリアーデ宗教史学の神髄が読みとれる、神話学・心理学・民俗学・人類学的な高度な入門書。

未來社
東京都文京区小石川3－7
電話(814)5521　振東7-87385

書を活性化するために、テーマ、内容、更には装丁などあらゆる事柄を再検討することが必要であろう。我々書店人は、この厳しい時代に人文書の豊かさ、おもしろさをどうしたら読者に伝えることができるか、真剣に考えなければならないのではないか。

最後に、ブックフェアに於けるベスト30を記しておく。

1 鬼がつくった国・日本　内藤正敏・小松和彦（光文社）
2 地獄の思想　梅原　猛（中公文庫）
3 いのちとかたち　山本健吉（新潮社）
4 異人論序説　赤坂憲雄（砂子屋書房）
5 無縁・公界・楽　網野善彦（平凡社）
6 神と仏　仏教と日本人①　桜井好朗編（春秋社）
7 鬼の研究　馬場あき子（三一書房）
8 妖怪の民俗学　宮田　登（岩波書店）
9 童子考　郡司正勝（白水社）
10 共同幻想論　吉本隆明（角川文庫）
11 ケガレの構造　波平恵美子（青土社）
12 物語の結婚　藤井貞和（創樹社）
13 「いき」の構造　九鬼周造（岩波書店）
14 八犬伝の世界　高田　衛（中央公論社）
15 神々の精神史　小松和彦（北斗出版）
16 物語・差別・天皇制　山本ひろ子他（五月社）
17 昔話と日本人の心　河合隼雄（岩波書店）
18 中世の文学　唐木順三（筑摩書房）
19 隠された神々　吉野裕子（講談社）
20 仏教と民間芸能　関山和夫（白水社）
21 神話と国家　西郷信綱（平凡社）
22 日本人の神さま　戸井田道三（筑摩書房）
23 原初的思考　宮田　登（大和書房）
24 一遍上人　栗田　勇（新潮社）
25 日本人の心の歴史　現代思想（青土社）
26 文化と両義性　山口昌男（岩波書店）
27 イモと日本人　坪井洋文（未来社）
28 銀河と地獄　川村二郎（講談社）
29 神道の成立　高取正男（平凡社）
30 日本中世の民衆像　網野善彦（岩波書店）

人文書講座X

女性・ジェンダー・n個の性

芹沢俊介

女性

フロイトは、女性を性的発達の面からふたつの期待（仮説）を基本に把えている。ひとつは、「体質は素直に機能に順応するであろう」という期待であり、もうひとつは、「決定的方向転換はすでに思春期前に開始又は完了せられる」という期待である。簡単に説明すると、女子の目的受動性（男子の目的能動性に対し、目的を受動的に追求するのを好む傾向あるいは同じことだが受動的目的の方を好むという傾向）という体質は、性的な機

能の発達に平行してあらわれる。つまり、クリトリスが男子のペニスに相当している時期は「小さい女の子は小さい男の子である」けれど、やがて性的機能（感じやすさ）の部位を部分的ないし全的にヴァギナに移してゆくにしたがって、男の子と同様に持っていた攻撃衝動すなわち目的能動性は影をひそめ、女性に特有の目的受動性という体質をあらわにしてくる、これがフロイトの言う第一の期待である。

第二の期待は次のように述べられる。男子にとっても女子にとっても最初の性的拘束（愛の対象）は母親である。けれど、男子がその関係を全生涯を通じて貫ぬくのに対し、女子はその性的機能の中心部位を転じていかざるをえないのに応じて、最初の性的拘束である母親を離脱し、父親拘束へ、さらには父親拘束をも脱し、父親以外の男性の拘束へと転換してゆく。その場合、この対象拘束の転換のメカニズムはすでに最初の母親による性的拘束の段階において決定されてしまう。フロイトは、この段階を父親拘束のエディップス段階に対し、前エディップス的前史と呼んでいる。

フロイトによれば、母親拘束の離脱のメカニズムは、去勢コンプレックスが司っている。男子の場合、去勢の発見は女子の性器を眺めることによって、大切に思っていたペニスが必ずしも身体にくっついていなくてはならぬものでもないのだという印象を受けた後から発生する。男子のエディップス・コンプレックスは、自己のペニスをもって母親を欲望し、競争相手の父親とのあいだに葛藤を生みだすことであるが、このエディップス・コンプレックスは、母親を欲望しているそのペニスをもてあそんだために父親から去勢威嚇を受け、女子と同じ状態になるその恐怖（去勢コンプレックス）からついに母親への欲望と父親の除去（父親にとって代わること）を断念することによって超えられる。

女子の場合も同様、去勢コンプレックスは男子の性器を眺めることによって開始される。女子は男子との違いから、自分もペニスを欲しがるようになる。このペニスに対する羨望が、女子の去勢コンプレックスである。この去勢コンプレックスが女子にとってのペニスであるところのクリトリスをもてあそぶことによる快楽を上回るとき、クリトリスによって支えられていた目的能動性は断念され、受動性が優勢を占めるようになる。女の子は、

この目的受動性にうながされてエディップス段階に入る。別な言い方をするなら、ペニス願望をかなえてくれない母親への愛（性的拘束）を離脱し、ペニス願望をかなえてくれる存在としての父親に逃げこむ。いまや、母親は自分と父を奪い合うライバルである。

男の子にとって、去勢コンプレックスはエディップス・コンプレックスの破壊を決行させる動因であったのに対し、女子の場合逆に、エディップス・コンプレックスを準備するのである。ここも言いかえるなら、男子の場合去勢コンプレックスはエディップス段階に入ってから父親によって与えられる。一方、女の子は順序が逆で、前エディップス段階に去勢コンプレックスが発生している。そして、すでに記したように、女子では去勢コンプレックスが父親によって子供を生むことを欲望し、ついで父親以外の男性によって子供を生むことを欲望するのだ。すなわち、子供はここでペニスを象徴するものである。このように、去勢コンプレックスが、女子が能動性を断念し、はじめは父によって、次には父以外の男性によって目的（ペニスの獲得）を遂げようという女性特有の目的受動的な性格をつくるのである（『続精神分析入門』）。

これがフロイトの言う第二の期待である。こう概観してくると、フロイトの女性把握のふたつのポイントは目的受動的な傾向という一点に集約されることが分ろう。

吉本隆明は、フロイトのこのような議論の七面倒くさい手続きをふまえながら、フロイトの女性理解を大胆に抽象化している。「〈女性〉というのは、乳幼児期における最初の〈性〉的な拘束が〈同性〉（母親）であったものをさしている」、と（『共同幻想論』）。一見乱暴にみえるこうしたフロイトの議論の抽象化はしかし、これまでフロイトを要約してきたところからみるかぎり、たいへん正確であることが知れる。母親拘束の離脱のメカニズムを去勢コンプレックスに求めるフロイトの議論は、女子における前エディップス的前史（母親拘束段階）における去勢コンプレックスの生成をはっきりと語っているからである。

だが吉本隆明のこのようなフロイトの抽象化はもう少し別のモチーフを孕んでいる。たとえば、N・ブラウンは、去勢コンプレックスの働きを否定する。そして「精神分析学は常に子供は人間の父親である、という立場を

とるべきである」と主張し、エディップス段階への転換を「自分自身の父親になることによって死を克服しようとする探求」だと定義する。ここで死と述べられているのは、母親との別離の与える実質を意味している。子供は母親を愛しているからこそ母親からの別離を死と感じるのである。それゆえ、この死からの逃走というモチーフにおいて子供は男女の別なく能動的である。先にみたフロイトの少女分析が語っているのは、母親を子供とともに得たいという欲求によって、受動性（N・ブラウンの文脈では母親から生まれたという事実を指す＝芹沢）を能動性に転換しようというエディップス的企てである。ただ、このような企てが父親を対象とする以前にさかのぼることができることだけが男子とのあいだの差異である。

差異の初源だけを取りだす吉本隆明の抽象化が周到なのは、N・ブラウンのように去勢コンプレックスを否定し、そこに死からの逃走という動機を置いても、自己の議論が微動だにしない点である。

吉本隆明は、フロイトの女性把握に対するこうした抽象化をベースに次のように女性論を推し進めてゆく。

〈女性〉が最初の〈性〉的な拘束から逃れようとするとき、もし男性以外のものを対象として措定するとすれば、その志向対象はどのような水準と位相になければならないだろうか？

このばあい〈他者〉はまず対象から排除される。〈他者〉というのは〈性〉的な対象としては男性である他の個体か、女性である他の個体のほかにありえない。するとこのような排除のあとでなお残される対象は、自己幻想であるか、共同幻想であるほかないはずである。ここまできてわたしなりに〈女性〉を定義すればつぎのようになる。あらゆる排除をほどこしたあとで〈性〉的対象を自己幻想にえらぶか、共同幻想にえらぶものをさして〈女性〉の本質とよぶ、と。そしてほんとうは〈性〉的対象として自己幻想をえらぶ特質と共同幻想をえらぶ特質とは別のことを意味してはいない。なぜならば、このふたつは女性にとってじぶんの〈生誕〉そのものをえらぶか〈生誕〉の根拠としての母なるじぶん（母胎）をえらぶことにほかならないからである。（「巫女論」）

男性の場合、〈性〉的対象に女性でも男性でもない架空の対象を選ぶことはありえない。なぜなら、男性にとって母親から生まれたという受動性＝生誕は自分が母親になるという能動性（母胎）によって相対化できないからである。言いかえれば、男性は生誕と母胎、あるいは対幻想としての自己幻想と共同幻想の循環の環からはじきだされるものとしてのみ存在しているのだ。男性は自己幻想や共同幻想に入るためには対幻想を放棄しなければならない。逆に言えば対幻想であるためには自己幻想あるいは共同幻想を離脱しなければならない。これが吉本隆明の記述が差し示す女性と男性の差異である。

吉本隆明はけれど先の引用文の前で男性が最初の性的拘束から逃れる場合、他者を除いたとき唯一性的対象として「母性にたいする回帰」を選択することはありうるだろう、という微妙な言い方をしている。母性は、自己幻想でも共同幻想でもない。また他者そのものでもない。とはいえ母性は、男性にとって最初の性的拘束である異性、すなわち母親と不可分であるという点で、他者性を完全に払拭していない。こうした母性への回帰が起こりうるためには、男性に対し、少くとも、最初の性的拘束である異性に対する感情が母性と分離できるまで成熟していることが要求される。母と子という関係が両者に認識されるための時間が対幻想に導入されることが不可欠である。むろん、この時間のなかに、フロイトのいうようなエディップス・コンプレックスからの離脱とともに植えつけられた母子相姦の禁止も含めていいだろう。だが、ここでも吉本隆明は周到であるように思える。親子という概念をただ、時間が導入された対幻想としか述べていない。エディップス・コンプレックスという観点が揺らいでも、こうした定義は、依然として揺らがないからである。これは、吉本隆明におけるフロイトの性概念の脱構築である点で、優に脱資本主義的である。

ジェンダー

I・イリイチによると、産業社会はふたつの神話を作りだした。第一は、セックスに関するものであり、第二はより多くの平等を求める運動に関するものであるが、どちらの神話も虚偽である、と言う。

I・イリイチによると、セックスという語は〈人間〉が理念として考えられるようになった啓蒙時代には女性

の差別に限定されていた。一九世紀の最後の四半世紀には男性と女性の両者に共通な何ものかを意味するようになった。この語はまた十九世紀末までには、フロイトがリビドーと呼んだひとつのジェンダーなき力へと道を開く一種の鉛管システムを意味するようになっていた。現代にいたりセックスは、セクシュアリティという内容枠にしぼりこまれることによって、ジェンダーなき性として完成した。ジェンダーなき性の完成態としてのセックスは、ホモ・エコノミクスの出現にとって必要な前提条件である（『ジェンダー』）。

I・イリイチはこのようなセックスを、決して人類史に普遍的なものではなく、産業社会以後の経済によって媒介されたものとし、ヴァナキュラーなジェンダーと対置させる。性ははじめからセックスではなかった。ジェンダー、それは稀少性＝欠如性という原理をまだ社会が知らなかったときの性のあり方である。それはセクシュアリティへと縮小されていない社会における男と女の対照的な相互補完性を意味している。男にかかわる場所、時間、道具、課題、話しことばの形、動作、知覚などは、女にかかわるそれらと区別される。このかかわりが時間と場所に固有なものであるゆえに、社会的ジェンダーはヴァナキュラーなジェンダーと名づけられるのである。

ここでいそいで付け加えておきたいことがある。ひとつはセックスもジェンダーも、I・イリイチによって理念型、すなわちひとつの概念の構築物（思考像）としてのみ提出されているのであって、歴史的実在でもなければ、真の実在ですらないという点である。ジェンダーとセックスは資本制以前から資本制への産業制度の転換を説明するために用意された理念型である。

もうひとつは、ジェンダーもセックスも、エロス的な性概念ではないという点である。つまり対幻想としてあらわれる人間を規定する概念とは異なった、「自然に働きかけ、自然を人間化しようとするばあいに発現してくる〈性〉」（吉本隆明『対幻想』）である。対幻想における性はI・イリイチの性に解消できなければ、イリイチの性もまた対幻想における性に解消することはできない。

I・イリイチがセックスとジェンダーという理念型を導入することによって行おうとしたことは、人間と社会が〈西欧化〉したことがもたらした欠陥を指摘し、その動因を分析し、西欧絶対主義すなわち近代主義のプラグ

を抜くことである。

人間が西欧的になるとは、人間がホモ・エコノミクスとなることであり、社会が西欧化するとは、「社会の諸制度が、地域社会から〈離床した〉商品生産に向けてつくり直され、商品生産がこうした存在（ホモ・エコノミクスのこと＝芹沢）の基本的ニーズに見合うようになる」ことである。ホモ・エコノミクスは、こうした西欧化した社会の主体である。ホモ・エコノミクスは稀少性＝欠如性を原理とする経済環境に、埋めこまれているゆえに、激しい所有欲に衝き動かされ、それは一種の羨望やねたみという形をとって、すべての経済決定に関与している。なぜ社会は稀少性＝欠如性を原理とするようになったのだろうか？　I・イリイチは、資本主義という制度の光源に照らされたものはすべて「資源（リソーシズ）」として浮びあがってくるからだと言っているように見える。その核心となるのは共有地である。I・イリイチは「コモンズが資源（リソーシズ）へと変化（へんげ）することだけが、ジェンダーのセックスへの変化（へんげ）になぞらえることができる」と書いている。共有地の資源化、いいかえれば投資と利益の対象への変貌こそ、ヴァナキュラーな社会（と言うことは過不足のない固有の地域社会が構成する差異化の世界）から稀少性＝欠如性を原理とする同一性の社会への転換を特徴づけるものであった。ジェンダーのホモ・エコノミクスへの変化を具体的に思い浮かべるには、失業者、マルクスの言うところの産業予備軍の存在する社会と、これが存在しない社会をイメージするのが適切であろう。またI・イリイチによれば、この稀少性＝欠如性の意識が人々を平等という幻想的な目的へと駆り立てる動因だと述べている。

ところで、I・イリイチの思想で興味をひくのは、人はすべて十八世紀までは、男か女または子どものいずれかであったという観点である。子どもについては、とりあえず考察の外におこう。引用してみたいのは、次のような箇処である。

> ジェンダーとセックスはともに、生殖器管をひとつの社会的実在に転換させる。ジェンダーは、陰茎を無数の男根像（phalluses）の類型へと転じる。これにたいしセックスは、一つの、国際的規模での、ひとをおどし、ねたましさをおぼえる〈陰茎〉を

生産するにすぎない。（注解7）

あるいは、どこでもいいのだが、とりわけ次のような記述。

ジェンダーの母体の外で生まれようと、セックスの母体から引き渡されてそのなかで教育されようと、女は男を無視するわけにはいかない。だが母体はどれも、女には男と異なる相対的力を授けている。ジェンダーが支配するところでは、男と女は全体として相互に依存しており、男女の相互依存は、闘争、搾取、挫折にたいして限界を設けている。ヴァナキュラーな文化は、男と女のあいだに一種の休戦を設定しているが、時として非情なものとなることもある。男が女に肉体的苦痛を与える場合でも、女性群は男性の心に仕返しをして責めさいなむ仕方をよく心得ている。こうした休戦とは真反対に、稀少性＝欠如性の体制は、女性にたいして、絶えざる戦いと、絶えざる新種の敗退とを押しつける。ジェンダーの支配のもとでも、女性は従属的であることもあろうが、経済を媒介するセックスの体制下ではどんな場合も、女性は第二の性（セックス）であるにすぎない。彼女たちは、ジェンダーのない賭けで遊ぶゲームでは勝とうと負けようと、永遠にハンディキャップを負わされている。ここでは男も女も、ともに裸にされ、中性化されていて、けっきょく勝者になるのは男である。（第七章「ジェンダーの崩壊から経済を媒介とするセックスへ」）

I・イリイチはホモ・エコノミクスにおいては男性が第一の性で女性が第二の性であるのは、ペニスをもつものとペニスをもたないゆえにペニスをもちたいと羨望するものとの差異の必然的なあらわれだと主張しているように見える。ペニスをもつものは第一の性であることから賃労働を優先的に自己の領土化し、第二の性は不可避的に影の労働＝シャドウ・ワークの領域を押しつけられることになる。これは資本主義社会以前のジェンダーのまったく知らない経験であった。

こうしたI・イリイチの主張は、資本主義以前の社会になく、資本主義社会になって生まれたフロイトの精神分析に対する批判と攻撃を含んでいると言っていい。フ

ロイトの去勢コンプレックスおよびエディップス・コンプレックスの神話が、産業社会におけるセクシズム（性差別主義）を絶え間なく生産しているという批判である。別な言い方をすれば、ヴァナキュラーな社会におけるジェンダーがもっていたペニスの欲望はファルス（男根）の欲望へと通底しているのに対し、産業社会におけるセックスにおいてはペニスの欲望はファルスの欲望への通路を断たれている。I・イリイチはこのような虚勢化をさして「中性化」と呼んでいる。セックスは、中性化されたファルス（の欲望）だと言わんばかりである。人間の西欧化がここに完成する。

そしてこの西欧化を善とする神話を支えているのが、冒頭に記したふたつの神話、すなわちセックスと平等に関する神話である。

n個の性

元来ペニスはファルスに通底していたのにいつの間にかペニスはファルスから切り離されてしまったという議論をフロイト批判として激烈な形で提出したのはG・ドゥルーズ＝F・ガタリである。ここでファルスを無意識の欲望機械と置き替えてみるなら、事態はいっそう明瞭になろう。ドゥルーズ＝ガタリ的に言うなら、無意識の生産と社会的な生産とが相互に規制しあい、バランスをとりあっている状態がI・イリイチのヴァナキュラーなジェンダーという理念型がつくる社会のイメージである。これはI・イリイチが述べるまでもなく、資本主義

古代史研究の最前線 全四巻

定価各 3,800円

いま、一般的に古代史ブームといわれるなかで、真の学問的開拓精神が問い直されようとしている。日本の古代は学問としてどこまで明らかにされてきたか、どの分野の何が問題とされているか、などである。それに応えて、今後確かに日本古代史を背負っていくであろう人々によって追求を試みたのが本書である。

第1巻 政治・経済編(上)

古墳出現前夜の墓制研究＝山岸良二／「天皇」と「皇子」＝早川万年／大和政権の起源と初期の天皇＝前之園亮一／渡来人＝加藤謙吉／国造と県主＝篠川賢／大化改新＝山尾幸久／天皇号の成立とその意義＝森公章／他7項目

第2巻 政治・経済編(下)

初期庄園の展開＝小口雅史／平安初期の政治改革＝西別府元日／平安時代の氏族＝宇根俊範／平安京と律令政治＝古瀬奈津子／古代家族と女性＝服藤早苗／律令制下の刑罰と赦＝佐竹昭／他10項目

第3巻 文化編(上)

日本神話＝松村一男／記紀神話＝神田典城／飛鳥・白鳳・天平の絵画＝百橋明穂／日本古代の道教＝高山繁／古代人と神祇＝高嶋弘志／在地の固有信仰と律令国家＝増尾伸一郎／古代の文書＝新川登亀男／他7項目

第4巻 文化編(下)

明法学＝松田和晃／古代説話の表現世界＝多田一臣／平安朝の漢文学＝藤原克己／中国における渤海史研究の現状＝石井正敏／平安時代の彫刻＝紺野敏文／平安仏画＝田口榮一／他6項目

雄山閣出版

102 東京都千代田区富士見2-6-9
☎03(262)3231 振替東京3-1685

以前である。ヴァナキュラーな社会では言語から習俗にいたるすべてに固有性が刻印されている。この固有な地域社会では社会的生産と無意識の生産（欲望機械が行う生産）とはずれることはあっても、そのずれはおのずから修正がきくような弾力性のあるずれである。

このようにI・イリイチがヴァナキュラーなジェンダーという理念型によって資本主義社会以前のイメージを提出することで資本主義のプラグを抜こうとしたのに対し、G・ドゥルーズ＝F・ガタリは分裂者という理念型でもって、資本主義の終末を語ろうとする。この場合、分裂者とは資本主義社会によって社会的生産の欄外に、つまり境界の外においやられた欲望する機械を意味する。したがって資本主義の終末が語られはじめるのは、分裂者が境界線のむこう側から境界線をこちら側へとのりこえはじめるときである。

ところで、ドゥルーズとガタリによれば資本主義は無意識の生産を抑制するように要請する。社会的生産を至上とするこの社会が無意識にたいし強いる抑制を媒介するのが家庭である。家庭はそれゆえ、〈保留する肛門〉である。家庭は「抑圧を委託された代理人」なのである。社会との関係で言いあらわせば、社会的な抑制（資本主義社会という組織体を抑制の構造を含めて再生産するために不可欠な抑制）が家庭的な抑圧を必要としているのである。

ではなにが、こうした抑制と抑圧を欲望に抗して行なわせようとするのであろうか。I・イリイチなら社会の西欧化であり、人間の西欧化であり、あるいは西欧的であることに執着する社会と人間であると答えることは間違いない。ドゥルーズ＝ガタリは、西欧的であることに執着する社会と人間を生みだすことに執着しているのが、精神分析家だと述べる。そして、西欧的人間――ドゥルーズ＝ガタリによれば文化的人間――を生みだすのがエディップスである、と主張する。

こうした認識をもとにエディップスとそれを生みだす家庭（実は社会）の解体をラディカルに指嗾する。ふたりは、性を人間の形態でとらえる表象に非人間の形態でとらえる表象を対置する。当然ここで人間は西欧化した人間、文化的人間を意味し、非人間は無意識を仮託された分裂者を意味する。そして一方の表象は男と女であり、他方の表象はn個の性である。男と女という性の人間の

形態でとらえる表象の根拠をなすのは、またもや去勢（コンプレックス）とエディップスである。これに対し、無意識は去勢もエディップスも知らない。だから非人間的である。この非人間的な性はひとつ（男だけ）でもなければ、ふたつ（男と女）でもない、n個の性が存在するのだ。いうまでもなく、一個の主体のなかに。

社会はこの主体に対して、性欲を人間の形態で捉える表象を押しつけ、またこの文体自身も自分自身の性欲についてこうした表象を自分に与えるのであるが、分裂者分析（精神分析の資本主義的、人間的であることに対して＝芹沢）は、こうした人間の形態で捉える表象を超えるものなのである。欲望する革命の分裂者分析の定式は、まず、〈いくつもの性を各人に〉ということになるであろう。（『アンチ・オイディプス』）

フロイトを脱構築した吉本隆明の抽象的なそれゆえ超現代的な女性概念、資本主義以前の性と社会をイメージするために（資本主義のプラグを抜くために）I・イリイチによって提出されたジェンダーという理念型、G・ドゥルーズ＝F・ガタリの説く分裂者のn個の性という考え方。これらが形成する三角形は、資本主義晩期の現在を超えていこうとしている私たちの性をとらえるときに、いまなくてはならない橋頭堡である、と思う。

文献表

吉本隆明『共同幻想論』（河出書房新社）
吉本隆明・芹沢俊介『対幻想』（春秋社）
G・フロイト『精神分析入門』（正・続）（日本教文館）
N・ブラウン『エロスとタナトス』（竹内書店新社）
I・イリイチ『ジェンダー』『シャドウワーク』（岩波書店）
G・ドゥルーズ／F・ガタリ『アンチ・オイディプス』（河出書房新社）
J・ボードリヤール『誘惑の戦略』（法政大学出版局）
C・G・ユング『元型論』（紀伊國屋書店）
W・ライヒ『性の革命』（角川書店）

G・バタイユ『エロティシズム』（二見書房）
M・フーコー『臨床医学の誕生』（みすず書房）

千石剛賢『父とは誰か 母とは誰か』（春秋社）
芹沢俊介『「イエスの方舟」論』（春秋社）
E・モラン『オルレアンのうわさ』（みすず書房）
J・ミシュレ『魔女』（岩波書店）
B・ベッテルハイム『夢の子供たち』（白楊社）
L・タイガー／J・シェファー『女性と社会変動』（思索社）
新島淳良『さらばコミューン』（現代書館）
永田洋子『十六の墓標』（彩流社）
ヴァン・デン・ベルク『疑わしき母性』（川島書店）
神島二郎『日本人の結婚観』（筑摩書房）
G・R・テイラー『歴史におけるエロス』（河出書房新社）
W・シューバルト『宗教とエロス』（法政大学出版局）
N・コーン『千年王国の追求』（紀伊國屋書店）
D・ディナースタイン『性幻想と不安』（河出書房新社）

カーン・ウォルフ編『マルクス主義フェミニズムの挑戦』（勁草書房）
アン・オークレー『主婦の誕生』（三省堂）
上野千鶴子編『主婦論争を読む』（勁草書房）
M・セガレーヌ『妻と夫の社会史』（新評論）

村瀬学『理解のおくれの本質』（大和書房）
田原克拓『初期・性格と心の世界』（性格教育センター）
本田和子『異文化としての子ども』（紀伊國屋書店）
スタジオ・アヌー編『子供！』（晶文社）
P・アリエス『子供の誕生』（みすず書房）
山住正己・中井和恵編『子育ての書』（平凡社）

S・ボーヴォワール『老い』（人文書院）
M・ミード『男性と女性』（東京創元社）
土居健郎『「甘え」の構造』（弘文堂）

モア・リポート班編『モア・リポート』女性篇・男性篇（集英社）
シェアー・ハイト『ハイトリポート』女性篇（西武タイ

ム）、男性篇（中央公論社）
石川弘義・斎藤茂男・我妻洋編『日本人の性』（文藝春秋社）
毎日新聞社人口問題調査会編『日本の人口問題』（至誠堂）
グループわいふ編『性――妻たちのメッセージ』（径書房）
E・C・ロス『死ぬ瞬間』（読売新聞社）
P・アリエス『死と歴史』（みすず書房）
松田道雄『死ぬことと生きること』（筑摩書房）
S・シュナイダーマン『ラカンの〈死〉』（誠信書房）
メカトーフ、ハンティントン『死の儀礼』（未来社）
R・A・ムーディJr.『かいまみた死後の世界』（評論社）
R・カステンバウム『死の世界を考える』（東京書籍）

なお、芹沢氏は家族論を中心に活躍されている評論家で、このリストに挙げた自著以外に『戦後社会の性と家族』（白川書院）、『家族の現象論』（筑摩書房）、『女性はいまどこにいるのか』（毎日新聞社）、『家族の現在』（大和書房、共著）等があります。

――編集部・注

常備寄託の見直し

代表幹事　相田良雄（みすず書房）

一　常備寄託制度は、出版社、小売店にとって、非常にメリットのある立派な制度であると存じます。

出版社にとってのメリットは、一年間、自社の書籍を書店の店頭に展示して貰えます。それによって出版社の在庫が回転するというメリットがあります。又、書店にとっても、一坪当り約百万円の書籍が必要だと存じますが、店頭の一部を請求がすぐ来ない書籍で棚展示ができるというメリットであります。

最近、常備寄託の見直しということが業界において問題になっておりますが、提案されたのは東販の角屋社長だと存じます。私は当然の提案だと存じます。

過去には常備寄託が取次店のメリットになったこともあります。それは小売店との取引を強化する上に大層な力を発揮したのです。しかし現在では取引は固定化して帖合変更も少なくなっています。ですから、取次店には常備寄託のメリットが少なくなってきたのです。取次店は常備寄託を扱ったからといって、一銭も口銭が貰えない上に、当然のことながら返品は八〇％以上あります。

常備書籍が平均三回転すれば送り四対返品一で返品率は二五％になります。しかし、取次店の試算では常備書籍は平均一回転強しかしておりません。返品率は五〇～四〇％になります。一冊当りの返品処理費用が一〇円以上（平均定価は千円前後）かかる上に、これだけ多くの返品量では、常備寄託の見直しを提唱されるのは当り前のことではないでしょうか。

例えば、常備を含めての返品率が三〇％以上の場合は、常備取扱の手数料を貰いたいと考えても不思議ではないでしょう。

二　現在、出版社が需要に対して常備量を出しすぎると、書店店頭の展示率は極端に悪くなります。これも当り前のことで、回転の悪い書籍を棚から抜かなければ、書店が経営を維持できないからです。最近のように専門書の棚が縮少ぎみの時は、特に専門書版元の常備に対して、よりシヴィアになっているのではないでしょうか。

しかし、一方では大型店が、競合する店にない書籍を展示して、読者に注目して頂こうという政策もみられます。これら書店のいろいろな要望に対応できるような出版社の常備政策が必要になってきております。

三　まず第一に考えなければならないことは、売れる書籍を常備に出品することです。小社でも毎年五〇点以上の新刊を刊行しておりますが、これを全部常備に出品すれば、毎年五〇点以上常備点数がふえてしまいます。前年度の売行が良くなかった書籍、在庫が少なくてすぐ重版しない書籍などを除いて総点数はふやさないようにしております。

次に、書店から送られた売上カードの分析によって、それぞれの書店で売れた書籍を常備していただきます。書店が選択しやすいように、分析表を常備の案内と一緒に送るようにしております。

常備寄託で一番よいのは、書店が単品選択できるようにするのが望ましいのですが、これは出版社も取次店も大変手間がかかるので、小社では売行良好書一四〇点（売上冊数で五〇％以上）を分野別に四セットにわけ、大半の常備店にはこれで対応して頂いております。そして小社に特別協力をしてくださる店、主として大型店と専門店には、五〇〇点を分野別、売行別、判型別に三〇

セットにわけ、書店にセット選択して頂き、常備寄託として送品しております。そして返品量が過大にならぬよう、常備の総量を年間送品量の一〇%強に絞るようにしております。

又、全国の特別に協力して下さる書店に対し、常備出品しない書籍のリストを送り、自由に選択して頂き、常備の追加送品をしております。これが全国で一〇軒位ございます。

小社では、常備寄託の返品は、すべて入帖しております。返品のうち一五%前後は、常備送品後の新刊です。書店が売れそうな新刊を、常備切替時まで店頭で売る努力をして下さったものの返品ですから、受取拒否はしておりません。

最後に、小社は、常備寄託を金額常備と考えております。例えば、一軒の書店に三〇万円の常備を出荷した場合、内容は自由に書店で裁量して頂き、三〇万円の返品をして頂くという考え方でございます。おかげさまで、小社は取次店、書店に協力して頂き、昭和六〇年度の売上分析は次のようになっております。

表1　売上分析（昭和60年度・金額）

	送　品	返品率	返　品
新刊委託（含長期）	26.1	40.6	10.6
注文（含注文延勘）	58.7	5.0	3.0
小売店常備	11.5	100.0	11.5
取次店常備	3.7	92.0	3.4
合　　計	100.0		28.5

みすず書房の例

結論として、出版社は書籍の内容、売行きをシヴィアに検討して、常備寄託に向く書籍のみを出荷するようにすること。又、常備のセット組についても、より書店の実状に見合って、こまかくわけ、希望するセットのみを出荷すること。常備店のなかでも特に自社に協力してくださる書店に対しては、特に力を入れて書店の希望を取

り入れること。逆に回転のよくない常備店に対しては、常備冊数を減らすとか、中止していただくとかして、より効率の良い常備店を選ぶべきだと存じます。

最後に、新刊委託、注文品の返品を減らす努力をして、常備寄託を出荷できる余地を残しておかなければならないと存じます。

表2　出版界全体での書籍部門別返品状況（昭和60年度）

	送　品	推定返品率	返　品	返品占有率
注文買切	44.9%	25.0%	11.2%	28.2%
延　勘	18.2	30.0	5.5	13.9
新刊委託	24.0	55.0	13.2	33.2
長期委託	7.1	65.0	4.6	11.6
常備寄託	5.8	90.0	5.2	13.1
合　計	100.0		39.7	100.0

注）送品と返品計のみ，大手取次の数字をもとに構成したもので，推定返品率・返品・返品占有率は相田の推定のパーセントである。

〔人文会最新情報〕

○人文会では、販売企画委員長の文章にもありますように、読書の秋にむけ、さまざまな販売企画を立てて取り組んでいこうとしております。最近の人文会のフェアーは、全集セット・フェアー、在庫僅少本・旧定価本フェアー、新刊書フェアーといろいろありますが、概して好評で、売上げもそれに見合っているようです。ひところの軽薄短小本の隆盛にもそろそろカゲリが見え、重厚な専門書がある程度は確実に売れるようになってきていると思われます。人文書にもようやく良い兆候があらわれはじめたということでしょうか。

○人文会恒例の秋の研修旅行が近づいてまいりました。この小冊子が出来あがりますころには、鹿児島から沖縄へ向けて勇躍、空を飛んでいることになるかもしれません。ふだんはなかなか足を伸ばすことのできない地域ですから、地元の取次さん、書店さんだけでなく、図書館状況を見て回ったり、地方新聞社との懇談会をもつなど、盛りだくさんの内容が予定されています。いつものようにハードスケジュールで、今回訪問させていただく各取次、書店、図書館、新聞社の皆様には御迷惑をおかけすることになりますが、よろしくお願い申し上げます。なお、この研修旅行の簡単な御報告は次号の「人文会ニュース」でおこなわせていただきます。（弘報委員会）

最近の販売活動から

販売企画委員長　菊池明郎（筑摩書房）

しばらく途切れておりましたが、人文会の販売活動について、御報告致します。

人文会には、本ニュース等を作る弘報委員会、特約店の資料作成、研修活動を担う調査研修委員会と、販売活動を行なう販売企画委員会の三委員会があります。ブックフェア等、販売に関わる御相談は、全て販売企画委員会の担当ですので、よろしくお願いします。

ニュースで御報告をしていなかったとはいえ、人文会は各種の販売活動を展開し、それなりの成果を産み出して参りました。ここ半年くらいの活動から、主なものを取り上げてみますが、皆様の今後の商いに何らかの形でお役に立てば幸いです。

人文会は二十二社の出版社によって構成されておりますが、各社の最新売行きベスト十点を集め、ブックフェアを、日本橋の丸善さんが試みられました。第一回目が昨年十月の一カ月間、二回目は今年の五月の一カ月間でしたが、いずれも売上げ目標をはるかに上回り、大成功でした。このことを聞きつけられた丸善さんの京都支店が、同様のブックフェアを本年十月に開催されることになりました。私達も大いに期待しております。手軽に開催できて、しかも読者には人文書の新鮮なものが提供できた点が成功の原因のような気がします。

次に、東大本郷生協さんがここ二年ほど三月期に実施されて成功しているブックフェアがあります。このフェアは、人文会各社が過去一年間に出版した新刊を集めて、組合員に提供するものです。買いもらした新刊、うっかり、広告や店頭で見落していた新刊を改めて確認できる良さがうけて、二年続けて成果が上がりました。

ちょっと変ったところでは、今年の五月に一カ月間、新宿の紀伊國屋書店さんで、在庫僅少本ブックフェアを行ない、読者から好評を博しました。このフェアの欠点は、各社で、常にタマを用意できないので、一年に一～二店にしか開催頂けないことです。逆にこのことが、お客に対しては魅力となり、いい結果が得られました。売上げを分析してみますと、単行本の珍しいものに人気が集中していました。紀伊國屋さんの担当のお話では、全集ものは古書店でも入手可能なものが多いのですが、評価の高かった単行本は、古書店でも、なかなか見つからないために売行きも良かったのだということです。それに、発行当時の値段で売ることも、読者にとってはメリットだったようです。

外商活動絡みでは、次の二つの試みが成功致しました。

まず第一に、名古屋市の丸善さんが、本年六月に、人文会会員社二十二社を中心に、人文社会科学書の全集セットセールを開催されました。販売対象は、大学・短大・公共図書館等です。この時期は新年度の図書予算も決まっており、図書館側は、図書購入を開始します。それに合わせて、各社の主要な全集を一冊のパンフレットにまとめ、各図書館へ案内を出しました。丸善さんの会議室を使って、三日間展示会も行ないました。勿論一般の読者にもオープンにされましたが、結果は予想通り、図書館の購入が圧倒的に多かったもようです。ハガキによるDM、外商員がパンフレットをもっての訪問、その後のフォローという念入りな営業活動も成功の鍵だったと思います。約一カ月強の集中販売の成果は、定価で五千万円を越えたということで、私達に言わせれば、大成功だったと思います。

このことが、丸善さんの各支店に伝わり始めると、続々と人文会へも連絡が入り、今秋から、来春にかけて、各支店なりの取り組みをして頂けるということです。丸善名古屋支店の鈴木部長のお話しでは、工夫して努力すれば、まだまだ売れるとのことでしたが、全く同感です。

最後に、この夏、東京都内のある私立大学の図書館の蔵書調査を実施致しました。そもそものきっかけは、三月にその大学図書館の責任者の方と人文会とで、最近の大学図書館の実情について話し合いをしたことに始まります。その席上、夏休みになったら、蔵書調査をやって欲しいと提案され、人文会も、いい勉強になりそうだと判断をし、蔵書調査が実現しました。

色々と勉強にもなりましたが、各社、入れてほしい本で、入ってない本が、数十万円から数百万円にのぼることが分りました。人文会とは結びつきの深いと思われる大学図書館でさえ、新刊等の購入もれが結構出てしまうということです。九月末頃には、各社からの購入希望リストに基き、何を入れてもらえるか分りますが、かなり程度入れて頂けることになりそうです。

図書館出入りをされている書店さん、是非蔵書調査をやってみて下さい。

最後に、販売について、面白いアイデア等有りましたら、販売企画委員会に御連絡下さい。積極的に取り組みたいと思います。

〔編集後記〕

「人文会ニュース」46号をお届けします。

本号では、早稲田大学図書館整理課の山本信男氏に、大学図書館での書籍購入の方法とその実態について、出版社への要望なども含めて、書いていただきました。専門書中心の人文会各社のような出版社にとって、どんどん増設される図書館、とりわけ規模の大きな大学・公共図書館にいかに書籍を購入してもらうかという問題は、これからますます重要なテーマになっていくと思われます。山本氏の論文が参考になればよいと思います。

それから、西武ブックセンターの今泉正光氏には、本年二月に行なわれた「日本精神史の深層」フェアの結果を報告していただきました。新しい視角からの見直し・再編成によって、これまで隠れていたそれぞれの書物の価値が再認識される、そういう方法の可能性を提示されたものと思います。

また、好評の〈人文書講座〉には、最近、『対幻想』『「イエスの方舟」論』『家族の現在』『思想としての風俗』等、矢つぎばやに好著を出版された芹沢俊介氏に、専門の立場から家族、性の問題についての力作をいただきました。書店の棚揃えに必要なブック・リストも作っていただきました。

三人のかたに、ここであらためてお礼を申し上げます。

（西谷）

人文会会員名簿

（〒113-91　東京都文京区　本郷局私書函89号）　　1986. 10. 現在

	社名	担当者	〒	所在地	電話	FAX
	青木書店	古川　清	101	千代田区神田神保町1-60	292-0481	292-0475
	大月書店	原田　敦雄	113	文京区本郷2-11-9	813-4651	813-4656
	御茶の水書房	橋本　盛作	102	千代田区九段北1-8-2	230-2510	265-7767
幹事	紀伊國屋書店	佐久間健雄	156	世田谷区桜丘5-38-1	439-0125	439-1094
	勁草書房	石橋　雄二	112	文京区後楽2-23-15	815-5277	814-6854
	社会思想社	渡辺　和彦	113	文京区本郷1-25-21	813-8105	
幹事	春秋社	神田　治	101	千代田区外神田2-18-6	255-9611	253-1384
幹事	晶文社	萬洲　隆男	101	千代田区外神田2-1-12	255-4501	255-4506
	誠信書房	濱地　正憲	112	文京区大塚3-20-6	946-5666	945-8880
	創元社	重光　義彦	162	新宿区山吹町77	269-1051	269-1092
幹事	筑摩書房	菊池　明郎	101	千代田区神田小川町2-8	291-7651	295-0220
	東海大学出版会	岡田栄三郎	160	新宿区新宿3-27-4 新宿東海ビル	356-1541	341-1833
会長	東京大学出版会	中平千三郎	113	文京区本郷7-3-1	821-2111 内7955	
	〃	竹内　康一		〃	811-8814	812-6958
	日本評論社	後藤　光行	160	新宿区須賀町14	341-6161	341-6990
	福村出版	福村　惇一	112	文京区小石川1-3-17	813-3981	818-2786
	平凡社	丸山　正美	102	千代田区三番町5Kビル	265-4492	263-9333
	法政大学出版局	市川　昭夫	102	千代田区富士見2-17-1 法政大学構内	237-1731	237-8899
代表幹事	みすず書房	相田　良雄	113	文京区本郷5-32-21	814-0131	818-6435
幹事	未来社	西谷　能英	112	文京区小石川3-7-2	814-5521	814-8600
	雄山閣出版	武　一雄	102	千代田区富士見2-6-9	262-3231	262-6938
	有斐閣	佐藤　進	101	千代田区神田神保町2-17	265-6811	262-8035
	吉川弘文館	川越　重行	113	文京区本郷7-2-8	813-9151	812-3544
休会中	東京創元社		162	新宿区新小川町1-5	268-8231	268-8030

販売企画委員会　◎菊池　○後藤　石橋　重光　竹内　佐藤　川越
弘報委員会　◎西谷　○原田　橋本　渡辺　丸山
調査・研修委員会　◎萬洲　○濱地　古川　岡田　福村　市川　武
◎印は委員長　○印は副委員長

髪の社会史

飯島伸子著（桃山学院大学教授）

定価2400円

太古の昔より、その神秘性、美しさの故に愛されてきた髪は、現代に至って鉄の道具でねじ曲げられたり、化学薬品によってその組織が破壊されるなど、かつてない受難の秋をむかえている。本書は、髪のもつ文化的意味や髪の演出者である美容師の健康障害の実態を紹介。

- 髪と文化
- 髪の美学
- 結髪の民俗と歴史
- 結髪業の社会学
- 髪の生理学

東京都新宿区須賀町14
☎03・341・6161
日本評論社

W. ブラインホルスト

われら北欧人

矢野創・服部誠訳　1800円

醒めた笑いと辛辣なアイロニー、そして社会諷刺。ユーモア迷路に繰り広げられる非条理的北欧人論。

東海大学出版会

東京都新宿区新宿3-27-4東海ビル
☎(03)356-1541　〒160

福村出版

矢島羊吉著

ニーチェの哲学

A5判／三二〇〇円

●ニヒリズムの論理　ニーチェほどさまざまな解釈を生む思想家も少ないだろう。著者は、ニーチェが示そうとした「ニヒリズムの自己克服」という考え方に最も関心を持ち、その論理を吟味し、さらに、「権力への意志」の思想との両立の可能性を探る。

矢島羊吉著

増補カントの自由の概念

A5判／三八〇〇円

東京都文京区小石川1-3-17　電話03(813)3981

認知科学選書7

心の科学は可能か

現代の哲学が「心」に関する豊かな考察の領域を開発してきた軌跡を辿りつつ「機能主義」と呼ばれる心の哲学の概要とその問題点を明らかにする。さらに、記号現象、知識という課題に関して、その解決の端緒を探る。

土屋　俊　¥1800

東京大学出版会
〒113 東京都文京区本郷7

モードのイタリア史

刊 旬 下 月 10

流行・社会・文化

R.L.ピセツキー　監修＝池田孝江
訳＝森田義之/篠塚千恵子/篠塚二三男
一ノ瀬俊和

今や現代モードの要となりつつあるイタリア。トーガからミニ・スカートまで、おしゃれの先進国を解き語る初のイタリア服飾史。
A5判・600ページ　●定価6,800円

平凡社
〒102 東京都千代田区三番町5／振替・東京8-29639

ウィーン精神 1

ハープスブルク帝国の思想と社会 一八四八－一九三八
ジョンストン　クリムト、シーレ、マーラー等古くて新しいウィーンの芸術家・思想家像。井上・岩切・林部訳　五六〇〇円

バルト美術論集

アルチンボルドからポップ・アートまで、自ら描く人＝バルトが自在な眼差しで読み解くエセー集。沢崎浩平訳　一八〇〇円

反革命

理論と行動 一七八九－一八〇四
ゴデショ　フランス革命史における知られざる部分、反革命の歴史と理論に、はじめて光をあてる。平山栄一訳　四八〇〇円

生命の文脈

統・生物学と哲学との間
飯島　衛　細胞の起原、意識の発生、構造主義ほか。多様なコンテクストから生命の意味を解読する刺激的論考。三六〇〇円

東京文京本郷
3丁目17－15

みすず書房

法政大学出版局

真理と方法 I

ガダマー　近代の科学的方法思考に覆い隠されてきた西欧古代からの伝統を呼び起こし、その意識化を試みた哲学的解釈学の全容。轡田・麻生・三島・他訳/2800円

神の存在論的証明

ヘンリッヒ　デカルト後の近世哲学の歴史を表題の視点から捉え直し、その理解の根源的革新を図った現代哲学への問題提起。本間・須田・中村・座小田訳/3900円

年貢を納めていた人々

坂井洲二　近世西欧経済の担い手であった農民たちの暮しを、トイレの型式から精神生活にまでわたって生き生きと再現し、我国近世との比較におよぶ。2500円

世界社会の構造と動態

庄司興吉編　地球的規模で進む人類と自然生態系の危機を直視し、「世界社会」概念の確立とその具体的分析をめざす。気鋭の社会学者11人による意欲作。3500円

102 東京都千代田区富士見2　☎03-237-1731

農耕の起源と人類の歴史

Ph・E・L・スミス著　戸沢充則監訳・河合信和訳
食料生産革命が引き起こした人類史の変容を広い視野から捉え直す。〔有斐閣選書〕一五〇〇円

解放の哲学をめざして

衆愚は天に愚ならず
花崎皋平著　住民運動や旅など日々の実践と思索、そして多くの人々との出会いと交流。いまここから解放の途を問う。〔有斐閣新書〕六八〇円

有斐閣　東京・千代田・神保町
03－264－1311（代）

61年9月20日刊行開始

日本考古学論集

全10巻／斎藤忠編集

●第1回配本／三冊同時発売

❶考古学の基本的問題
❷集落と衣食住……
❸呪法と祭祀・信仰……
❹容器・道具と宝器……
❺生業・生産と技術……
❻墳墓と経塚……
❼官衙と寺院……
❽武器・馬具と城柵……
❾北方文化と南島文化
❿日本と大陸の古文化

第1回配本以降、毎月一冊ずつ刊行
A5判・上製・函入／定価各5,900円

吉川弘文館
東京都文京区本郷7－2－8／電話03－813－9151

迫真のフォト・ドキュメント！

加藤博ルポ＋写真　大転換をもたらしたフィリピン民衆の巨大なパワーの原点は？新生フィリピンはどこへ行く？黄色い革命の意味と今後を探りつつ、この国の貧困・抑圧・腐敗の構造的な病巣にメスを入れる。　A5判・1500円

★フィリピンの黄色い革命

ラバン

東京文京 本郷2-11 大月書店 電話(03) 813-4651

許・蔡編／田中・福永訳

日本軍占領下のシンガポール

〈46判〉定価二八〇〇円

―華人虐殺事件の証明　15年戦争下の一九四二年、シンガポールでくりひろげられた中国系市民大虐殺事件の実相を証言と資史料の初邦訳で証明！

山科三郎著

人間発達の哲学

〈46判〉定価一六〇〇円

いまある自分をのりこえるために

青年はどのような可能性をもっているか――諸状況の中での人間形成について人類史的な視野から考察。

東京神田神保町1 青木書店 電話(03) 292-0481

御茶の水書房

ナチスとはどのような人びとか!?

大衆プロパガンダ映画の誕生

ドイツ映画「ヒトラー青年クヴェックス」の分析

G・ベイトソン／宇波彰＋平井正 共訳

精神分析、記号論等の手法を縦横に駆使しながら、〈知〉の巨人ベイトソンが一九三三年に上映されたプロパガンダ映画をもとにナチズムを支える精神の構造を解読する。

A5変型／二五〇頁　予価二二〇〇円

〒102 東京都千代田区九段北1－8－2
電話03(265)5746／振替東京8－14774

人生と愛

フロム／佐野哲郎、他訳　フロムがラジオで自らの思想を平易に語った、総決算の書。■一八〇〇円

芸術を創造する力

イメージのダイナミックス

徳田良仁　芸術創造の根源を求めて、作品の背後に秘められた精神のドラマを再現す■三八〇〇円

科学的世界像

ファン・フラーセン／丹治信春訳　科学理論がえがく世界像はどこまで真なのかを考察■三八〇〇円

紀伊國屋書店

本　店：東京都 新宿区 新宿3-17-7
出版部：東京都世田谷区桜丘5-38-1

現代**教養文庫**

〔復 刊〕

夢野久作傑作選

❶死後の恋❷氷の涯❸悪魔祈禱書❹ドグラ・マグラ❺爆弾太平記

定価五八〇～八〇〇円
揃価3280円

久生十蘭傑作選

久びさの重版です。この機会にお揃え下さい。

❶魔都❷黄金遁走曲❸地底獣国❹昆虫図❺無月物語

揃価3240円
定価五八〇～八〇〇円

東京・本郷 **社会思想社** 813－8105

わが異端の昭和史

石堂清倫　東大新人会、日本共産党、日本評論社、満鉄調査部と変遷する軌跡。赤裸な歴史の証言。2500円〒300

子育ての社会史

横山浩司　子育ての知恵を発見する聞書きを中心に、子育てを社会史・生活史の中に位置づける。2200円〒250

パンとサーカス

プラントリンガー／小池和子訳　社会衰退としてのマスカルチュア論　古代から現代まで。3600円〒300

病める海

素顔の日本漁業　日本遠洋漁業に再生の道はあるか。秘密主義の壁を破る迫真のレポート。2200円〒300

東京文京 後楽2-23 **勁草書房** 振替東京 5-175253

好評発売中！

トランスパーソナル宣言

——自我を超えて

宇宙的アイデンティティの心理学
R・ウォルシュ＋F・ヴォーン編　宇宙意識・悟りを探究する最新の潮流——エッセンスを一冊で。
吉福伸逸／菅靖彦／プラブッダ他訳　2400円

新《自由の時代》

ギ・ソルマン／内田他訳　先進世界の新しい時代の動きを探訪したベストセラー。1800円

春秋社 東京都千代田区外神田 2-18-6 ☎(03)255-9611

非売品

昭和61年10月10日発行　年4回発行　第46号
発行所　人文会　みすず書房内
〒113 東京都文京区本郷5－32－21
（113－91東京都文京区　本郷局私書函89号）

回覧者印	回覧者印	回覧者印	回覧者印